下関地域の基層文化

― 地名と伝説を手がかりに ―

井上孝夫

― 目次 ―

1．序　論 ― 課題と方法 ―

2．綾羅木 ― 古代朝鮮加耶国とのかかわり ―

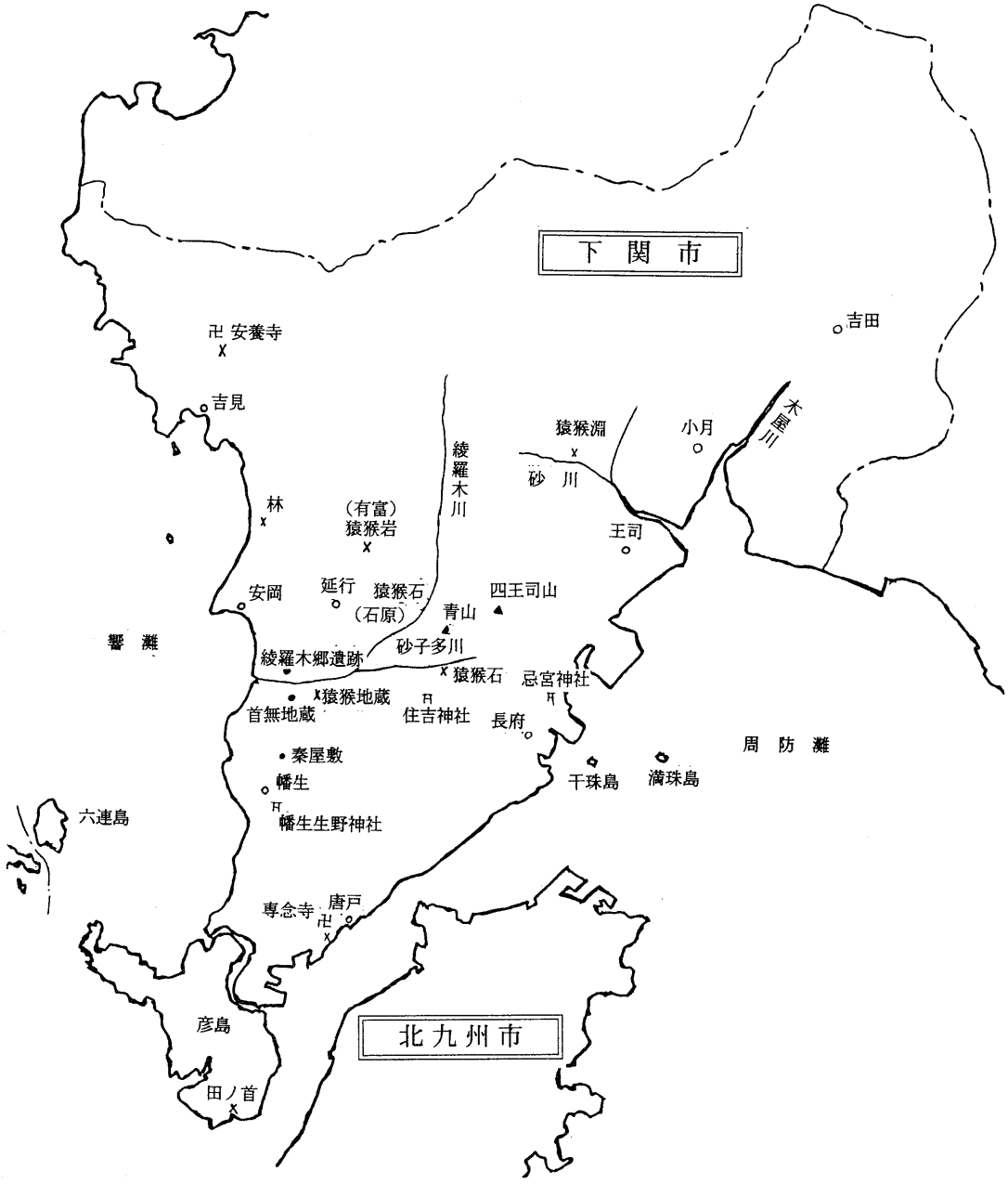
3．幡　生 ― 神功皇后伝説の謎 ―

4．延　行 ― 猿猴伝説のリアリティ ―

5．結　語

＜　注　＞
＜文　献＞
＜付　記＞

〔図１〕下関地域の基層文化略図



1．序　論　－課題と方法－

日本列島と朝鮮半島とは一衣帯水の距離にあるといわれるが、下関地域は北部九州とならんで朝鮮半島・アジア大陸との交流の玄関口に相当する。そして実際にも、このような地理的な関係が下関の地域文化を形成するうえでの重要な要素となってきた。本稿ではこうした観点から、下関地域の基層文化を検討していくことを課題としたい。

日本の基層文化という場合、一般には縄文文化を指すことが多い。しかし縄文文化は東日本のブナ帯（夏緑広葉樹林帯）を中心に営まれていたのに対して、照葉樹林を自然植生とする西日本ではその文化的痕跡は相対的に希薄なものとなっている。従って下関地域を含む西日本に関しては稲作と金属器の使用に代表される弥生文化を基層文化としてまず捉えることにしたい。そのうえでその基層性を弥生文化から古墳時代を経て大和王権による地域支配が確立する時期にまで拡大してみることにしよう。この時代は一言でいえば、朝鮮半島から日本列島への大規模な人口移動が起こり、彼ら渡来人による統一的な政治権力が日本列島において確立する時代ということができる。

だがその一方、この時代は日本の歴史上、『古事記』『日本書紀』によって描かれた神話的世界の時代であり、文献史料は限定されている。このような場合、地域の歴史を探るのには遺跡，伝説，地名，寺社縁起などが重要な手がかりとなる[1)]。これらのうち土地に刻み込まれた人間活動の確固たる“物証”である遺跡を別にして、あとの三点のもつ意味合いについて若干の説明をしておくことにしよう。

① 伝　説

伝説は地域の民衆によって語り伝えられてきた一つの物語である。その意味で民衆意識を反映するものとみることができる。しかし話の内容は説話的，教訓的なものが多く、しかも支配者の側から語られる場合が多い。また残酷な内容を含むものも見受けられる。民衆意識というものは多分に権力に同化された者の意識という性格をもっている。しかしその内容にはやはり歴史的リアリティが含まれているとみるべきである。そこで伝説を手がかりとする場合には、話の内容を鵜呑みにすることなく、ある種の裏読みをしていかなければならない。伝説を手がかりに歴史的リアリティを探り出す作業は権力によって貶められ抹殺されていった人々の闇の世界を照らし出すことにほかならない。

② 地　名

地名もまた地域の文化や歴史を把握する際に有力な手がかりを与えてくれる。例えば山口県美東町の「長登」地名が「奈良登」の転訛であるとのいい伝えが東大寺大仏の原料供給地を解明するための切っ掛けを与えたように、地名は歴史的事実を映し出すことがある。

また全国各地に点在する同一の地名が同一の歴史的リアリティを反映していることも多く、すでに解明されている地名由来によって特定地域の歴史的事実が浮き彫りにされる場合もある。

いずれにせよ、地名は一つの「文化遺産」としての位置を占めているのである。

③ 寺社縁起

寺社縁起は寺社の創建事情について伝承されてきた事柄を書き記した文献史料であり、伝説と同様の性格をもっている。ただしそれは江戸時代初期に幕府寺社奉行に提出する際に書かれたものも多く、十分な裏読みを必要としている。

およそ以上のような方法的観点にたって、本稿では下関地域の基層文化に光を当ててみたい。

2. 綾羅木（あやらぎ） －古代朝鮮加耶国とのかかわり－

まず取り上げるのは響灘（ひびきなだ）に面する綾羅木の地名由来である。この地には弥生時代初期と古墳時代の複合遺跡である郷台地遺跡があり、下関地域のなかでも最も早くから渡来人による開発が行われていたと考えられる。綾羅木という地名も朝鮮半島との何らかの関係をうかがわせるものがあるが、この地名には何が眠っているのだろうか。

『下関市史』や『下関の地名』によると、綾羅木の由来については次の三つの説があると指摘されている。

第一の説は竹生（たけお）寺の縁起に基づくものである。竹生寺の開祖とされる大和の僧金実仲が長門北浦の海岸で修行していた際に、西方より和歌を詠じる声が聞こえ、波間に漂う香木が空へ舞い上がり竹生寺のある観音山へと飛び去った、というもので、その様子をみていた実仲が「あやら！」という感歎の声を発したことに由来するというものである。

第二の説はイザナギノミコトがみそぎをしたといわれる“アワキハラ”（檍原ないし阿波岐原）に由来するというもの。

第三の説は神功皇后伝説とのかかわりで、皇后が三韓征伐の際に勝鬨（かちどき）をあげた地で、新羅に関係する場所だとするものである[2)]。

だがこれらの説はいずれも問題が多い。第一の説は極めて観念的でこじつけ的であり、第二、第三の説は神話レヴェルでの説であり、これもこじつけ的である。要するにこれらの説は綾羅木の地と朝鮮からの渡来人との関係を全く視野に入れていない点で説得力に欠けているのである。

これらの説に対して高橋文雄氏は次のように指摘している。

「この附近は古くから開け、当然朝鮮との交流もあったことが考えられ、渡来者も多かった筈で、そのなかの秦（ハタ）氏の部族である漢部（アヤベ）があり、この地に居住して養蚕や織物などの仕事に当たったものではないか。アヤラギはあるいは綾原（アヤハラ）がアヤラになり、これに綾楽の文字を当ててアヤラキとなったものか。『楽（ラ）』をラキ・ラクというようになる例は多い。」[3)]

ここでは確かに古代朝鮮との関係が踏まえられている。そしてここで指摘されているように渡来人のなかでも秦氏の存在は極めて重要である。しかし秦氏のなかの漢部が綾羅木の由来だというには飛躍があるように思われる。その点で、綾羅木＝漢部説も説得力に欠けるのである。

では綾羅木の由来とは一体どのようなものなのか。これまでの説で最も有力なのは金達寿氏

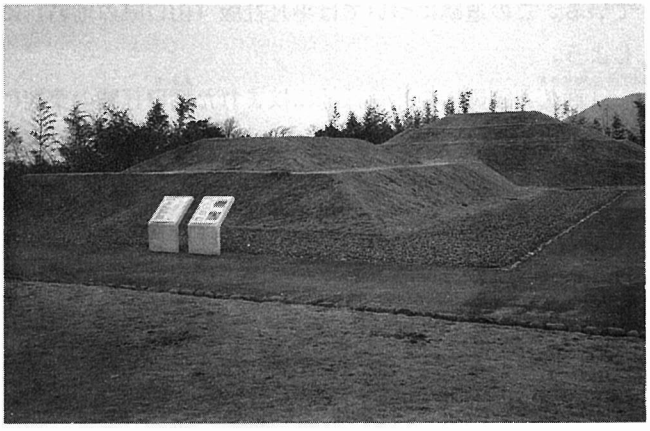
による次のような指摘である。金氏によれば、綾羅木とは古代南部朝鮮にあった加耶（加羅）諸国のうち、安耶（安羅，安那とも書く）に由来するという。つまり「綾」とは「安耶」であり、「羅」は「国土」の意味，「木」は「来る」ということで、綾羅木とは「安耶の国から来たもの」の意味となる[4]。金氏によれば長門国の旧名である穴門（穴戸）も加耶諸国のうちの安那（安耶，安羅）に由来し、穴門とは「安那人の居所」の意味だという[5]。

この指摘でわかるように加耶諸国は古代日本と深いかかわりをもっている。加耶諸国とは『日本書紀』に登場する任那日本府のあった地域に存在した小国家群のことであり、その建国は新羅と同時期であったが紀元562年に新羅に併合されてしまうため、加那滅亡の100年以上ものちに書かれた『出雲国風土記』や『古事記』『日本書紀』では加耶の記述は新羅のこととして語られているという[6]。

その一方、加耶諸国の存在は発掘調査によっても確認されている。韓国金海市の大成洞古墳からは金官加耶の王墓が発見され、そこからは「鉄の武器をもつ強力な軍隊をもつ王国」を示す鉄製品と、巴型銅器・筒型銅器といった古代日本との交流を示す副葬品が発掘されている。加耶諸国の鉄製品は成分分析の結果、５～６世紀の九州の鉄製品と類似していることがわかり、九州で発見される支石墓も紀元前２世紀に加耶諸国から伝わったものではないかと指摘されている[7]。

また現存する地名をみても、加耶人が北部九州から山口県にかけて移住してきたことをうかがわせるものとなっている。福岡県前原町には可也山があり、山口県豊北町の極めてユニークな地名である「特牛」の由来も加耶諸国中の「喙・己呑国」の「己呑」にあるとされる[8]。それに加えて、綾羅木や穴門の由来が加耶にあるというわけである。

このように下関地域から北部九州にかけては古代朝鮮の加耶諸国からの影響がみられる。綾羅木の地名由来も中国や新羅に圧迫されるなどして日本列島にたどり着いた一団にあるとみるべきだろう。



綾羅木郷遺跡・若宮古墳

3．幡生

— 神功皇后伝説の謎 —

次に取り上げるのは綾羅木の南方に位置し同じく響灘に近接する幡生の地名由来である。幡生地名の由来についてはこの地が熊襲征伐の際の神功皇后の旗上げの地であり、船出の際多くの軍船の幡がたちならんだことにあるとされている[9]。これは生野神社に伝わる由来記である。

しかし神功皇后の実在性について疑問視されている以上、この幡生由来説をそのまま信用するわけにはいかない。問題は生野神社を神功皇后伝説から切り離して何がみえてくるのかということである。このような観点から生野神社をみると、次の二つの事情が浮かび上がってくる。

一つは生野神社は本来幡生八幡宮という名称であり、それが1945年に現在名に改名されたという点である。この幡生八幡宮は社伝によれば清和天皇時代の貞観2年(860年)に創建されたという。もう一つは神社内に6世紀頃の前方後円墳で横穴式石室をもつ宮山古墳が存在するという点である。おそらく幡生八幡宮とはこの古墳を意識してつくられたものであり、その祭神は古墳の被葬者にかかわる神だったはずである。そして幡生という地名由来もこの神社や古墳と深くかかわっていたと考えられる。

そうだとすると、八幡宮とはもともとヤハタの神を祭り、新羅系渡来人である秦(はた)氏の祖神を祭っていたのだから、幡生の「幡」は「秦」につうじる。つまり幡生とは「秦部」の意味であり、この一帯は渡来人秦一族の開拓地だったのである。幡生の北隣りの稗田(ひえだ)に「秦屋敷」(あるいは「秦部落」)と呼ばれる豪族跡があったという伝説がこの仮説を裏づけている。また稗田に小字名で「畑」地名が残っているのも秦一族の痕跡とみることができるだろう。

生野神社(旧幡生八幡宮)境内に位置する宮山古墳

またこの「秦屋敷」という伝説の地からは弥生時代中期と推定される地蔵堂遺跡が発見されている。この遺跡については平凡社版『山口県の地名』によって、その概要をみておくことにしよう。

「武久(たけひさ)と綾羅木の沖積低地に挟まれた垢田(あかだ)丘陵の東端に標高約40メートルの独立丘陵があり、その頂上には地蔵を祀る祠があって、古くからこの一帯は地蔵堂とよばれている。昭和44年(1969)宅地造成によって一基の組合箱式石棺が掘り出された。……(中略)……棺内には2本の鍍金された棒状の金属製品が長軸方向に並べて置かれ、棺の中央からやや東に位置して破砕された一枚の青銅鏡と風化した管玉が散乱していた。棒状の金具は、漢代中国の馬車に使われた蓋(かさ)の柄の先端につけた蓋弓帽(がいきゅうぼう)で、その先端は花形に作られ、中央には熊頭を彫り込んだ前漢末頃の製品であることがわかり、日本でただ一つのものである。鏡もほぼ同時代に制作された内行花文精白鏡である。」[10)]

この記述に登場する蓋弓帽を残した弥生人と秦屋敷の伝説とがどのようにかかわるのかはよくわからない。だが両者は何らかのかかわりがあるとみてよいのではないだろうか。つまり、蓋弓帽をもたらしたのは秦氏であり、その秦氏が弥生時代から古墳時代にかけてこの一帯に居住していたと考えられるのである。

そこで次なる問題として、秦氏と神功皇后伝説とがどのような関係にあるのかという点が浮かび上がってくる。仲哀天皇の后にして応神天皇の母である神功皇后の実在性についてはすでに述べたように疑問視されている。神功皇后が記紀に登場する理由についての大方の推察は次

のようなものである。

① 神功皇后は『魏志』「倭人伝」の卑弥呼に擬定されている。それは、中国の史書に記されている以上、記紀の編者にも無視できないからである。

② 神功皇后の実在性は薄い。記紀では、大和政権を簒奪した応神天皇の系譜を正当化するために、息長(おきなが)氏，和珥(わに)氏らによって語り伝えられてきた神功皇后伝説を取り入れたのではないか[11]。

ここに登場する応神天皇こそ九州から大和へ東征した人物であり、「神武東遷」伝説と重ね合わされるべき天皇である。この応神天皇はもともと秦一族の大王なのであった。八幡宮に応神天皇とその母神功皇后が祭られているのはそのためである。また全国の八幡宮の総本社である大分県の宇佐八幡宮は応神天皇と神功皇后のほかに比売(ひめ)大神を祭っている。宇佐の地にはもともと比売大神を女王とする先住者の国家があったが、それを応神を王とする秦一族が征服したために八幡宮には比売大神も祭られることになったのである[12]。

秦一族は単なる渡来人というのではなく、日本列島に移住してきた最大にして最強規模の新羅人であった。彼らははじめ九州で独自の国家をうちたて、のちに勢力範囲は関東地方にまで及ぶことになる。従って下関地域における秦氏の足跡もこのような観点から捉えておかなければならないだろう。仲哀天皇と神功皇后がおいたとされる長府豊浦宮(とよらのみや)は「韓」を意味する「豊」地名の同一性からみて、もともとは豊前の秦一族の本州への玄関口であり、彼らはここを拠点に瀬戸内海ルートと、逢坂峠を経て幡生の地から日本海に至るルートをもっていたのではないだろうか。下関幡生の秦一族は豊前の秦氏との関連で捉えるべきだと思われる。それとともに下関地域の古墳（例えば仁馬山古墳や若宮古墳）と九州の古墳との形態的類似性が指摘されているが[13]、その理由も秦一族とのかかわりで捉えるべきだろう。

〔表－1〕下関地域の主要古墳

名　称	形　式	築造年代	全　長
観音岬	前方後円墳	4～5世紀	?
植松	方形墳	4～5世紀	東西 15m 南北 19m
仁馬山	前方後円墳	4～5世紀	74 m
若宮	前方後円墳	5世紀半ば	39.7m
宮山	前方後円墳	6世紀	23 m
上の山	前方後円墳	6世紀後半	100m超
秋根1号	円墳	6世紀半ば	?
秋根2号	（破壊）	6世紀後半	?
有富	円墳	6世紀後半	直径20m

＊現地案内板，郷土の文化財を守る会「史跡の道」，『日本の古代遺跡』30（山口），保育社，1986年，より作成。

最後に残ったのは神功皇后伝説の謎である。下関地域には幡生由来説のほかにも武久，吉母，壇ノ上などの地名由来説や、お斎祭，数方庭といった祭事にからんで神功皇后伝説がいまなお濃厚に残されている[14]。その核心には皇后の三韓征伐の伝説があり、さらにその背景には強力な反新羅の思想が貫かれている。下関地域に残る神功皇后伝説は日本が新羅の侵略に脅えていた時代に、反新羅の拠り所として拡大していったものといえるだろう。その時代とは白村江の戦いで日本が唐・新羅の連合軍に敗れて(663年) 以後、天智朝下で対外防備のために長門城を築き、一旦は廃止されていた豊浦団を復活させ(802年)，四王司山に新羅征圧のための毘沙門天を祭るといった一連の動きのあった7世紀後半から9世紀にかけてのことであった。幡生八幡宮の創建もその一環とみるべきだろう。忌宮神社に伝わる数方庭の祭事もまたしかりである。

4. 延　行 －猿猴伝説のリアリティー

最後に取り上げるのは綾羅木川右岸の低地帯を指す「延行」に関連する伝説である。延行地名の由来について、『下関市史』は「昔は石原から有富へかけての総称であった。長く延びた村であったことから地名が出たといわれている」[15]と書き記している。だがこの説明は何とも歯切れが悪い。「延行」の地が地形からみて「長く延びた」という感じからは程遠いのである。「延」と「行」という漢字の意味を詮索して地名の意味を割り出そうとしても結局何もわからないのではないだろうか。

そこでここでは新説を提示したい。「延行」とはいまは「のぶゆき」と呼ばれているが、もともと「えんこう」と称されていて「延行」の字が当てられ、それがいつのまにか「のぶゆき」と読まれるようになった、というのが新説のあらましである。地名は最初に「音」があって、それに漢字が当てられる場合が多い。従って漢字の字義よりも「読み」が重要になってくる。しかし「延行」の場合は最初の「読み」に漢字が当てられることによって、別の読み方に変化したのではないかと思われる。同様の例として、「代馬」の意味の「しろうま」に「白馬」の字が当てられ、いつのまにか「はくば」と呼ばれるようになった場合が挙げられる。

では「えんこう」とは何か。それは「猿猴」のことである。辞書の説明によれば「猿猴」とは「猿の総称」とあるが、下関地域では共通語でいうところの「河童」（カッパ）のことを「えんこう」と称しており[16]、「延行」地名はこのカッパの意味での「猿猴」に由来する、というのが新説の趣旨である。実際のところ〔表2〕に示すように、下関地域には猿猴石，猿猴岩など猿猴にかかわる伝説が数多くある。そこで各地の猿猴伝説について簡単にみておくことにしたい。

〔表２〕下関地域における猿猴伝説

猿猴の遺物（所在地）	伝　説　の　内　容
猿　猴　石（勝山）	砂子多川に猿猴が住んでいて馬にいたずらをする。
猿　猴　石（石原）	同　　上
猿　猴　淵（員光）	砂川（員光川）に猿猴が住んでいて馬にいたずらをする。
猿　猴　岩（有富）	薬師堤というタメ池のなかに猿猴母子がいて村人にいたずらをする。
猿猴地蔵（伊倉）	綾羅木川に猿猴が住んでいて馬にいたずらをする。
猿　猴　石（福江）	林村の川尻水溜りに猿猴が住んでいて馬にいたずらをする。
猿　猴　銭（吉見・安養寺）	猿猴からの寺宝として穴明銭２枚が残る。
猿猴伝承（南部町専念寺下の海）	猿猴が人間の生き血を吸う。
猿猴伝承（彦島田の首下の海）	田の首八幡の「牛の宮の祭」の際、牛を洗ったときに落ちるダニを食べに猿猴がやって来て、ついでに付近の子供を海に連れ込む。

＊注（17)(18)(19)(20)(21）で挙げた文献、および佐藤　治『ながとの民話』赤間関書房 1972年、などより作成。

▷勝山砂子多川の猿猴石

勝山砂子多川に猿猴が住んでいたという伝説が残る。現在砂子多川の左岸に猿猴石が復元されているが、それにまつわって次のような伝説がある。

むかし、勝山には、沼や池や川がようけあって、砂子多川も綾羅木川も、それは美しい川じゃった。

春になって水がぬるんでくると、もう、こどもたちは魚をとったり泳いだりしてあそんだ。おとなたちはというと、畑の仕事がおわると、汗をふいたり、牛や馬のからだをあろうたりして、一日のつかれをいやしておった。

ある夏の夕方、吾作さんが砂子多川で牛をあろうていると、いつもはおとなしい牛が、妙に落ち着きがない。目をキョロキョロうごかして、しっぽをふり、いっときもじっとしておらんそうな。

「こりゃ、どねえしたか。おかしいど、おまえは」

吾作さんが、牛のしっぽの方へまわってみると、なんと、牛の尻にエンコウがぴたっとひっついておる。

「しもうた、鋤金（すきがね）をあてることを忘れておった」

エンコウのきらうものは、お仏飯と金物じゃった。こどもが川へいくときは、

「エンコウに、しりこだまぬかれるな」というて、お仏飯を食べさせたし、牛や馬を川へつれていくときには、尻に鋤金をあててつれていったもんじゃ。吾作さんは、そうっと牛の尻にちかづいて、エンコウの首すじを、ぐいとつかんだ。

「この、くそたれが」

あばれるエンコウをこわきにかかえて、頭の皿の水をかき出した。頭の皿の水がのうなったエンコウは、だんだん力がのうなって、ぐったりしてきた。

吾作さんは、しめたとばかり、エンコウの手足を縄でしばり、納屋へとじこめた。

しばらくすると納屋の中から、

「水をくれ、水をくれ　……。苦しいて死にそうじゃあ。二度と悪さをせんけい、たすけてくれえ」

と、エンコウのしわがれた声がきこえてきた。

吾作さんは、そろそろ、たすけちゃろうとおもうとったけ、だいぶこりたようじゃと、納屋へはいっていった。

「よしかんべんしちゃろう。そのかわり、わしの田んぼの草をとってくれえ」

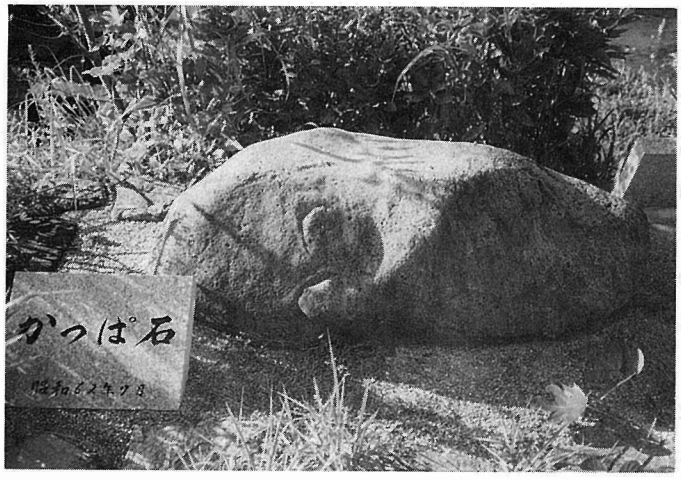
と、エンコウにいいつけた。

手足の縄をほどき、頭の皿に水をいれてやると、エンコウは、たちまち元気になった。

吾作さんは、エンコウの首に、縄をむすびかえて、田んぼへつれていった。縄の端をにぎって、畔の上でエンコウの田の草取りを見張っていると、なんと、そのはやいことはやいこと。吾作さんが、一日かかってもとりきれんほどの田の草を、みるまにとってしもうた。吾作さんは、たいそうよろこんで、エウコウの縄をといてやると、どこからか大きな石をかついできた。

「いままでは、人間や牛や馬に悪さをしておったが、これからは、この石が土になるまで、エンコウ一族は、けっして悪さをいたしません。」と、いうて、それきり、勝山の沼や池や川にエンコウがでてこんようになったそうな。

ふしぎなことに、エンコウが草とりをしてくれた田んぼには、二度と草がはえてこんじゃったと。[17]



勝山砂子多川に復元された猿猴（カッパ）石

石原（光明寺入口）の猿猴石（復元）

▷員光(かずみつ)砂川の猿猴淵

員光川は地元では砂川と呼ばれ、かつてその下流域は海であった。王司側から清末へ行くには船を利用しなければならず、渡船のなごりとして「浮き場の渡し」が残っている。その「浮き場の渡し」の対岸に猿猴淵があり、次のような伝説が伝わる。

昔むかし、員光川のえんこう淵（現在の山田橋の下流、員光川と門前から流れる小溝の合流点より少し下った山側が深い淵となって、えんこう淵と呼ばれていた）に一匹のえんこう（河童）が住んでいた。このえんこうが水遊びに来る子供をこの淵に引きずりこむので、村人は決して子供を近付けなかった。或時山田村の太田家の下男が、えんこう淵の土手の浅い処で馬の川入りをしていた。

ところがこのえんこうが馬の手綱を片方の手首にしっかりと巻きつけて、両手で力一ぱい淵に引張り込もうとした。驚いた馬は土手に飛び上がると、まっしぐらに太田家の馬舎に走り込んだ。えんこうは手首に手綱を巻いていた為、離れることが出来ず全身傷だらけ、頭の皿の水もきれて、馬舎の隅に気息奄々の処を、後からかけもどった下男につかまった。

えんこうは涙を流しながら「今迄、村の子供さんに、随分悪ふざけをして苦しめましたが、今後は決して悪いことは致しません。お礼といっちゃあなんですが、お宅の家運の隆盛と、山田八幡宮の庭に草が生えないように致しますので、どうか命だけはお助け下さい」

両手を合わせて命乞いをするえんこうの姿に主人も許してやることにした。頭の皿に水を入れてやると、急に元気になって、何度も何度も頭を下げながらえんこう淵に帰って行った。それから後は、太田家も益々栄えるとともに、山田八幡宮の庭には、草が生えなくなったと云う。しかしながら長い年月の間には、えんこうの神通力も効を無くしたのか、八幡宮の庭には草が生え出し、太田家も今は無い[18]。

▷有富の猿猴岩

かつて延行の一部だったとされる有富地区の薬師堤というタメ池に猿猴岩と称される岩がある。その岩にまつわって次のような伝説がある。

有富のタメ池にいたずら好きの猿猴母子が住んでいた。村人たちは4，5人でその猿猴を捕えた。母猿猴は子供の許しを乞うたが、村人たちは許さなかった。

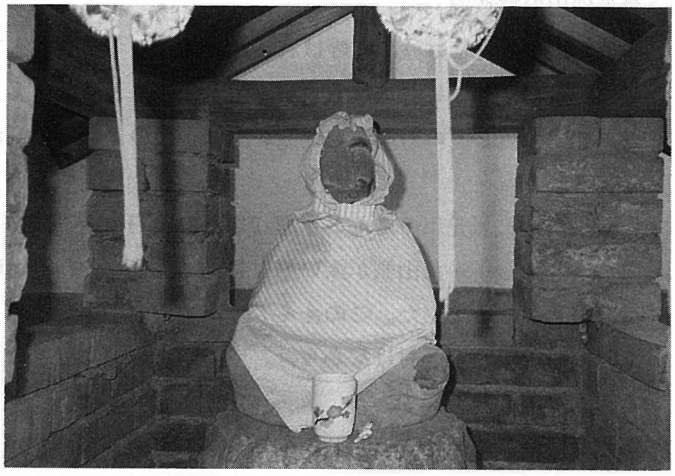
母猿猴は「この子を池の穴の中にとじこめて岩を置き、水が涸れるまで出てこれないようにします」と命乞いをした。そこで村人たちはそれを認めた。母猿猴は子供を穴に押し込め、大きな岩でおおった。

以来、タメ池を猿猴のタメ池、岩を猿猴岩と呼ぶようになった。村人たちは水中の岩がみえてくると、水を倹約するよう心がけているという[19]。

▷伊倉の猿猴地蔵

伊倉から勝山にかけては道の四つ辻などに地蔵が数多くあり、一説には合計88の地蔵が祭

られているという。そのなかで伊倉本町の四つ辻の地蔵は猿猴地蔵と呼ばれ一風変わった姿をしている。この地蔵には次のようないわれがある。



伊倉の猿猴地蔵（伊倉本町16－1）

昔は夏になると綾羅木川の淵まで牛や馬を水浴びに連れていった。ある時、村人の一人がいつものように馬を水浴びに連れていったところ、馬をつなぐ杭に猿猴が化けていた。それを知らず村人がその杭に馬をつないだところ、馬は猿猴に気づいて逃げ出した。村人は懸命に馬を追いかけ、ようやく馬を止めることができた場所がいま猿猴地蔵のある場所である[20]。

▷福江の猿猴石

福江の林（はやし）村の通称「はちかん」と呼ばれる場所にかつて猿猴石があった。高さ三尺ほどの丸い石だったが、市道拡張の際に取り除かれ、暗渠の蓋石として使われたという。この猿猴石に関しては『地下上申』のなかに次のような記載がある。

猿猴石　林村ニ有リ。

但し往古当村の川尻水溜りのところにえんこう住みて居り申候所に、その辺に馬をつなぎ置き候えば、その馬の綱をとき身に巻既に引込申ニ付、馬驚き欠（ママ）戻り申ニ付、猿猴身ニ綱をまきながら家村迄馬に引上られ候故、人々落合捕へ置こうし可申用意仕候へば、ゑんこう手を合せ種々相断申鉢（ママ）ニ相見候ニ付助ケ申候。然上は石を立置条此石あらん限りはいで不申候ニと約束を堅メ印しに建置申たる石ゑんかう石と申伝候事[21]。

これらの伝説によると、猿猴は川や海などの水辺に住んでいて人間（特に子供）や牛馬にいたずらをするが、結局人間に捕えられて許しを乞い、放免されて以後は姿をみせなくなる、という筋立てになっている。そして猿猴の共通語でのいい方であるカッパは想像上の妖怪であり、また水神である、というのが一般的な理解の仕方である。下関地域における猿猴伝説ももっぱら「水遊びに注意せよ」といった教訓話として理解されている。

このようなカッパ伝説の起源は江戸時代だというのが民俗学の通説となっている。しかしそれは日本各地で独自の名称で呼ばれていた類似の伝説がカッパ伝説として徐々に統一的な姿を形づくっていった時期を指すにすぎない[22]。だからカッパ伝説のもとになった地域固有の伝説の起源はさらにそれ以前に遡り得る可能性をもっているのである。果たしてカッパ

伝説は単に水難防止のための説話なのだろうか。

カッパ伝説は過去の歴史的リアリティの反映とみることができるのではないか。ここではこのような観点から下関地域の猿猴伝説の背景にある歴史的リアリティを読み解いていくことにしたい。そのための手がかりとして沢　史生氏によるカッパ伝説の解釈についてみておきたい。沢氏は民俗学におけるカッパ伝説の研究から一歩踏み込んで、カッパを製鉄史の観点から捉えている。カッパとは中国江南から渡来した海洋系の製鉄民だという。彼らはのちに王権側によって鉄の採掘権を奪われ、カッパとして貶められたというのである[23]。

まずこの説を下関地域における猿猴伝説に適用してみよう。そうすると、この地域に最初に渡来した海洋系弥生人が王権側によって猿猴に貶められたという構図になる。だがこの解釈は現在のことろ、下関地域において中国江南からの製鉄民を特定することが困難であるため成立しがたい。例えば住吉神社に祭られている筒男(つつのお)三神をこの中国からの海洋系弥生人だと特定することはできないだろう。また住吉神社成立以前に、成務天皇の時代に祭られていたとされる夷宮の祭神事代主(ことしろぬし)は出雲系の神であることから[24]、これも的はずれになってしまうのである。

そこで改めて下関地域における猿猴伝説を製鉄とのかかわりから眺めてみよう。すぐに気づくのは猿猴伝説の舞台が砂子多川や砂川といった「砂」地名とかかわっている点である。この「砂」とは砂鉄を意味するものであり、この二つの川では製鉄の原料である砂鉄の採取が行われていたとみてよい。次に勝山の伝説に採録されている猿猴がカナ気を嫌うという点に注目しよう。このカッパの属性について沢氏は言葉どおりに捉えるべきではなく、カッパは鉄を奪われたからこそ「鉄を嫌う」と逆説的に語られているのだ、としている。しかしこの説とは反対にここでは、そのまま猿猴はカナ気をおそれると捉えることにしたい。つまり猿猴は鉄の武器をもつ人間集団に征圧されたためにカナ気を嫌うのである。猿猴は鉄の文化に敗れたのである。この鉄の文化に対して、猿猴の文化には「猿猴石」のとおり「石」の文化だった。彼らの武器は石であり、猿猴伝説で人間に捕えられた猿猴が「石が土になるまで悪さをいたしません」と許しを乞うのは猿猴が石の文化を放棄して鉄の文化に服従せしめられた姿を語っているものとみるべきだろう。

猿猴伝説の基本的な構図は「鉄」と「石」の対立図式にあるとみたい。「鉄」の担い手は朝鮮渡来系の弥生人であり、「石」の担い手は先住の縄文人である。猿猴伝説の原型は先住縄文人が弥生人の砂鉄採取と水田開発とによって駆逐されていった歴史的リアリティの反映とみるべきではないだろうか。その意味で、数ある猿猴伝説のなかでも勝山砂子多川の猿猴伝説はその原型を最もよく伝えているように思われるのである。

日本列島における先住民族である縄文人と渡来系弥生人との出会いは決して友好的、平和的なものではなかったはずである。金達寿氏は吉野ケ里遺跡（佐賀県）が外敵を防ぐための環濠集落であり、しかもそこでは武器として矢じりが使用されていたことに関連して次のように指摘している。

「……狩猟採集の自然人であったかれら縄文人も東北地域における蝦夷・エミシといわれたものたちと同じように、自分らのテリトリーを侵して来た、弥生時代をつくった稲作

農耕という異文化のものたちに対しては抵抗もし、戦いもしたはずである。鉄の矢じり（鉄鏃）ならぬ石の矢じり（石鏃）は、そのかれらの有力な武器だったのである。」[25]

ここには縄文人と弥生人との戦いの歴史が的確に語られているように思われる。そして下関地域における猿猴伝説もまた、のちの時代の脚色や付会を伴うにせよ、その深層においては縄文から弥生への移行がどのようなかたちで行われていったのかを語り伝えるものといえるだろう。それとともに、綾羅木川右岸の「延行」地名も、先住縄文人たちが弥生人によって貶められた姿を映し出す猿猴伝説とのかかわりで捉えるべきだと思われる。

5. 結　語

本稿では綾羅木，幡生，延行という三つの地名とそれに関連する伝説を手がかりに、下関地域の基層文化を検討した。地名と伝説の解釈に基づく議論は大雑把なものにならざるを得ないが、従来の文献や史料からは出て来ない側面に光を当てることができたのではないかと思われる。最後に、短い検討のなかから浮かび上がって来た論点をまとめておくことにしよう。

一つは猿猴伝説の読解で試みたように、縄文文化が弥生文化にとって代わられる具体的な姿を「石」の文化と「鉄」の文化との対立としてみることができた点である。猿猴伝説は狩猟文化が稲と鉄の文化によって駆逐されていく過程を示している。伝説にみられるある種の残虐性や猿猴が田の草を取る「恩返し」の場面などはこの二つの文化の出会いと融合の経過が生々しく反映されているとみることができるのではないだろうか。

縄文文化を駆逐した弥生文化の担い手は新羅・加耶系といった朝鮮半島からの渡来人であり、彼らの痕跡は穴門，綾羅木，幡生，特牛などの地名に刻印されている。彼らの文化は稲作と金属器の使用によって特徴づけられるが、ここでは特に鉄と銅に代表される金属文化の側面について触れておきたい。

まず鉄についていうと、その原料である砂鉄の採取地が問題になる。この点に関しては、砂子多川の「砂子」や青山の「青」は本来砂鉄の意味だったのではないかと思われる以上、この周辺地域が原料供給地だったとみることが妥当だろう。また綾羅木郷台地遺跡から出土した鉄鉇（やりがんな）が国内生産された可能性が指摘されているが[26]、これについても砂子多川周辺が原料供給地として有力だといえるだろう。さらに、伊倉本町（川中小学校前）の通称「首無し地蔵」も現在は地蔵尊として祭られているが、本来は金属精錬にかかわる金精様だったのではないかと思われる。「眼病や子供の夜泣きに御利益あり」とするこの地蔵の伝承は製鉄文化における「一ツ目小僧」の伝説や製鉄神「白神」の伝説と同一の起源をもつのではないだろうか[27]。

しかし全体としてみると、下関地域では製鉄文化の痕跡は他の地域に比べて希薄である。むしろ銅文化の痕跡の方が色濃い。そもそもなぜ長府に和銅開珎の鋳銭所がおかれていたのかといえば、それは周辺地域で銅の生産が可能だったからにちがいない。それを裏づけるように、下関地域では採掘年代不明の銅山跡が数カ所確認されている。また新羅系渡来人秦氏は製銅と製鉄文化の担い手であり、福岡県の香春（かわら）岳は秦氏ゆかりの銅山であった[28]。「カワラ」とは「銅」そのものを意味する言葉だが、下関地域にもカワラ地名が分布しており、秦氏とのかかわりや古代銅山とのかかわりを暗示するものとなっている。これらの点については今後の課題

として、さらに調べをすすめていくことにしたい。

以上のように、本稿は下関地域における地名と伝説の本来の由来を解き明かすことによって、古代における渡来文化とその担い手に一つの視点を切り開くことができた。その意味で、本稿は下関地域の基層文化に対するささやかな序論的位置を占めるものである。

＜注＞

(1) この点に関連して、井口一幸氏は文字による記録のない時代の歴史の研究法について次のように述べている。「記録のない歴史を探る手段がないわけではない。郷土史という狭い視野からではなく、全国的に目をむけて神社、地名、伝承の中から解決の糸口を探すことができる。それに考古学という“物証”がつけば、一番確かではあるが、それがなくても、文学的発想で仮説を立て、文献史を心証的に進めれば、道は開けると思う。」（井口一幸『吾妻の国物語』国書刊行会，1978年，14頁。）

(2) 下関市市史編修委員会編『下関市史（原始－中世）』1965年，66－67頁，下関市立図書館編『下関の地名』1976年，108－109頁。

(3) 高橋文雄『山口県地名考』山口県地名研究所，1978年，222－223頁。

(4) 金達寿『日本の中の朝鮮文化』8，講談社（文庫版），1991年，220頁。

(5) 金達寿『日本の中の朝鮮文化』8，212頁。

(6) 金達寿『日本の中の朝鮮文化』8，139頁。

(7) ＮＨＫ－ＴＶ　歴史誕生『任那日本政府の謎－古代日本と朝鮮－』1991年3月4日放送分より。

(8) 磯部保正「地名と伝説にみる渡来人の痕跡」，『にぎめ』（豊北町郷土文化研究会）第2号，1985年，50－51頁。

(9) 『下関市史（原始－古代）』47頁，『下関の地名』73頁。

(10) 『山口県の地名（日本歴史地名体系36）』平凡社，1980年，482頁。

(11) 加藤　蕙「『記紀』の謎 100」，『「古事記」「日本書紀」総覧』（別冊歴史読本・事典シリーズ2），新人物往来社，1990年，所収，372－373頁。

(12) 秦氏と宇佐八幡宮との関係については，金達寿『日本の中の朝鮮文化』10，講談社（単行本版），1988年，237頁以下，を参照。

(13) 下関地域の古墳が九州の影響圏にあったという点については、小林　茂・中原雅夫『わが町の歴史　下関』文一総合出版，1983年，38－39頁，を参照。

(14) 「武久」地名はこの地で神功皇后が戦勝を祈願し、「武運長久」がつまって「武久」になったとされる。また「吉母」地名は神功皇后が外征からこの地に凱旋（がいせん）したときに海岸に打ち寄せられた海藻を集めて臥所（ふしど）をつくり応神天皇を生んだことにあるとされ、「寄せ藻」が吉母になったという。さらに長府の「壇ノ上」は神功皇后が出陣の時、壇を築いて神々を勧請したことに由来する，とされている。（以上，『下関の地名』73頁，123－124頁，93頁，を参照。）

その一方、お斎祭は「神功皇后が、斎宮（いつきのみや）に七日七夜，斎ごもりした、故事にちなんで、十二月七日夜から十五日までの朝まで、住吉神社の特殊神事として千数百年来、

承け継がれてきました」（『勝山あれこれ』下関市・勝山村合併50周年記念実行委員会，1989年，29頁）とされる。

さらに、数方庭は豊浦の宮に攻め込んで来た新羅軍の大将塵輪（じんりん）を仲哀天皇が倒し、その首を埋めて周りを踊り回ったことに起源をもつといわれる。現在、忌宮神社では毎年8月7日～13日の午後8時から10時まで、竹ざおに小旗と鈴をつけて踊られる。

武久，吉母，壇ノ上の地名由来はいずれも後世の付会とみるべきだろう。また木村勘一郎氏（「郷土の歴史を探る会」代表・前勝谷（まえしょうや）町在住）によれば、お斎祭はもともと新年の行事である和布刈（めかり）祭と一連の行事であり、年越しと新年を迎えるための祭事であって、神功皇后とは無関係だとしている。数方庭についても、豊北町田耕地区や殿居村では、江戸時代に旱魃の年に宮々を回って数方庭を行ったという事例から、「もともとは祈雨のための芸能であろう」とされる（宮本常一・財前司一『日本の民俗35・山口』第一法規，1974年，163頁）。また國分直一氏（梅光女学院大学）は数方庭の起源を「蘇塗」（ソッティないしスサルティ）という韓系の祭事に求め、「幟舞を伴う行事は、仲哀天皇・神功皇后・応神天皇を祀る、いわゆる八幡信仰系の神社であるために、塵輪伝説に付会された祭事として形成されている。しかし韓国の蘇塗行事が農耕行事であることからみて、本来的には農耕的意味をもつ行事から展開したものであろうと見るのが自然であろうと思われる」としている（國分直一「長府忌宮神社の数方庭行事をめぐる問題」，『地域文化研究所紀要』（梅光女学院大学）第1号，1985年）。

(15) 『下関市史（原始－古代）』67頁。

(16) 石川純一郎『新版　河童の世界』時事通信社，1985年，47頁，によれば、猿猴という呼び方は、山口・広島・島根の中国地方三県と香川・徳島・愛媛・高知の四国地方四県に分布しているという。ただし同書では、山口県の猿猴伝説は全く取り上げられていない。

(17) 『勝山あれこれ』10－11頁。

(18) 山本武人「民話　えんこうの恩返し」，王司郷土文化研究会『ふるさとおうじ』1987年，所収，18－19頁。

(19) 「えんこう岩といたずらの河童」，『ふるさと』（たくましい馬関っ子川中推進協議会）第1集，1984年，7－8頁，および有富在住の岩谷綾子さんからの聞き取りによる。

(20) 伊原晃融・内田貞紀「エンコウ地蔵」，『まんが　ふるさと昔話（下関編）』クオリティ出版，1989年，所収，および伊倉本町在住の田上さんからの聞き取りによる。

(21) やすおか史誌編輯委員会編『やすおか史誌』1990年，792－794頁。

(22) 小松和彦『新編・鬼の玉手箱』福武文庫，1991年，196頁、を参照。また中島河太郎氏によれば、柳田國男の『山島民譚集』（1914年）以後カッパ伝説は各地で競って集められたという（柳田國男『妖怪談義』講談社学術文庫，1977年，への解説、を参照）。

(23) 沢　史生『闇の日本史』彩流社，1987年，を参照。

(24) 山口県文書館編『防長寺社由来』7，1986年，496頁。

(25) 金達寿『日本の中の朝鮮文化』12，講談社（単行本版），1991年，15頁。

(26) 高倉洋彰『グラフティ・日本謎事典2　弥生』光文社文庫，1991年，85頁。

(27) 白神と製鉄伝承とのかかわりについては、拙稿「『白神』の研究(4)－男鹿半島白神不動尊の

由来」，『白神山地通信』第3号，1991年、を参照。

(28) 香春銅山と秦氏との関係については、金達寿『日本の中の朝鮮文化』10,161－171頁,を参照。

<文　献>

亀山八幡宮社務所編，1973
『下関外史』　亀山双書。
小和田哲男，1991
『日本の歴史がわかる本（古代～南北朝時代篇）』　三笠書房。
三坂圭治，1971
『山口県の歴史』山川出版社。
三好豊一郎・久米宏一，1989
『かっぱの伝説』　すばる書房。
野村武史編，1989
『ふるさと本・下関北浦談義』　下関北浦談義事務局。
大西正一，1991
『私本川中物語<上>』。
沢　史生，1985
『閉ざされた神々』　彩流社。
下関市教育委員会，1991
『下関の文化財』。
高橋政清編，1987
『神功皇后発掘』　叢文社。
谷　有二，1983
『日本山岳伝承の謎』　未来社。
山口県社会科教育研究会，1974
『山口県の歴史散歩』　山川出版社。

＊<注>に記した引用文献以外の文献に限定した。

<付　記>

本稿をまとめるにあたって、地域で地道な活動をつづけておられる郷土史研究家の方々や地域住民の方々の御協力を得ることができた。また梅光女学院大学地域文化研究所からは資料の提供を受けた。ここに特記して、感謝の言葉としたい。

(1992. 2. 12)